

ボーリングデータに基づく厚岸湾沿岸地域の完新世バリアシステムの復元 ：北海道東部厚岸湾沿岸地域の例

重野 聖之（茨城大学大学院理工学研究科）

日本では珍しいバリアシステム

北海道東部沿岸地域には、日本では珍しい現在でも活動的なバリアシステムが海跡湖として存在しており、風蓮湖、厚岸湖などはその代表例である。日本では5～6千年前以降の相対的海水準の低下（海退）により、バリアシステムである潮汐三角州の離水・放棄やラグーンの埋積を引き起こし、日本の多くの地域ではこれらのシステムは消滅している（斎藤，2011）。しかし、厚岸湖ではバリアや潮流口、上げ潮三角州と三角州上の砂質堆積物に牡蠣礁が形成されるなど現在でも活動的なバリアシステムの作る地形が存在します。

私たちは5～6千年前以降、海退期にある筈の日本において、何故、活動的なバリアシステムが厚岸に存在するのか？をテーマに調査を行いました。

バリアシステムの復元

厚岸湖周辺のボーリング資料と2009年に厚岸港で採取されたコア試料を用いて検討した。その結果、厚岸大橋付近での海進面は標高 -50 m に存在し、その年代は約11000年前と推定された。また、沿岸漂砂によって湖北と湖南地域に砂嘴が発生し始めたのは約8800年前のことであり、その際の水深は約16mと見積もられた。このバリアシステムの成立により潮汐平底三角州が発生したと推測される。一方、このバリアシステムが現在も地形的に維持されているのは、過去5500年前から続く海面の停滞の影響が大きく、この時期に厚岸湖のカキ礁も潮汐平底三角州上に生成し始めたものと推測される。

バリアシステムが存在している理由

厚岸沿岸低地においてバリアシステムが現在も地形的に維持されている理由としては、過去5500年前から続く海面の停滞の影響が大きく、海面はそれ以降安定しているため、海水準の低下（海退）による影響を受けないため、現在も活動的にバリアシステムが保存されたと考えられる。また、この時期（過去5500年前）より厚岸湖のカキ礁は上げ潮潮汐三角州上に生成し始めたものと推測される。